

# 「伊自良十六拍子」と雨乞いの成り立ち

伊自良北小学校

伊自良の雨乞いと太鼓「伊自良十六拍子」は、およそ300年以上前から伝承されています。その昔、伊自良の地域に日照りが続くと、10ある地区の村人が釜ヶ谷の山頂に集まって、鉦と太鼓を雷鳴のように打ち鳴らして雨乞いをかけ、雨をよんでいました。この雨乞いの行事は、『龍廻し・千把焼・太鼓「伊自良十六拍子」』を中心に行われてきました。

## ◆伊自良にある10の地区の「雨乞い」

幾日も雨が降らないときは、地区の代表が雨乞いをかける日を決め、村人に伝えられる。その雨乞いの晩になると、1戸に1把か2把の松明をもち、蓑笠をつけて氏神様に集まり、広場の真ん中で火をたき始める。

その時には、若者が鉦と太鼓をたたいて集まり、雨乞い音頭をうたい、たき火の周りを回り始める。その後、一同で氏神様に祈りを捧げて散会する。10あるどの地区でも、それぞれに日を決めて行う。「どこどこは昨日、雨乞いをかけたそう。どここの地区は明日かけるそう。」というように、ほぼ同じころに雨乞いをした。

## ◆お多度さん

各地区での雨乞いが行われても雨が降らないときは、村会や区長の合同協議会を開いて三重県の多度神社に願をかけに行くことを話し合う。多度神社へ行くことが決まると、直ぐに村から代表者を選んで夜半には出発する。そして、お多度様のご神体を仰ぐと御幣をいただき、大切に持ち帰る。それを村中が総出で迎え、その夜から雨が降るまで祈願が続く。

## ◆全地区がそろって行う「千把焼」と「雨乞いうた」

それでも雨が降らないこともある。そんなときは、村長から各地区に釜ヶ谷の山頂に集合する日時が伝えられ、いよいよ伊自良の雨乞いが行われる。午前2時、3時頃には、伊自良の10地区の人々が、蓑笠とわらじで鉦と太鼓を鳴らしながらそれぞれ釜ヶ谷に集まってくる。そして、時間になると柴を刈る場所を村長が決め、持ってきた鎌で柴を刈る。刈った柴を一カ所に集め、10地区の区長が一斉に火を付ける。青い芝は、恐ろしいほどの煙が天の果てまでも立ち上るように山々に広がる。やがて、鉦と太鼓が打ち鳴らされ村人による「雨乞い音頭」がはじまる。のど自慢のものが競って唄う。程なくして雨乞いを切り上げ、そろって下山する。

そして、麓の甘南寺にみんなが集まると、その頃、寺では伊自良中の僧侶が集まり大般若教を唱えている。ここでも再び、雨乞い音頭が行われる。

## ◆それでも雨が降らないときの「雨乞いの龍廻し」

いよいよ龍廻しが行われるが、年によってはいきなり竜廻しが行われることもあり、必ずしも順番通りでないこともある。龍廻しに使う龍は、長さが5間、胴回り4尺5寸ほどあり、竹細工で雄雌2尾がつけられる。完成すると蛇を龍の腹に入れて龍に精を入れる。夜明け前になると蓑笠にわらじ履きで村人があがめる甘南備神社の逢拝所（甘南備神社は余りにも遠いので遙拝の為に建立されたとされている）に集まる。龍は6本の支え柄で高く上げられ、鉦、太鼓の十六拍子も一緒に打ち鳴らして雨乞いのうたが始まる。

その後、大森地区からはじまり長滝地区まで、それぞれの地区の境界で龍を受け渡ししながら伊自良川の川原づたいに釜ヶ谷に登っていく。伊自良川水源の「龍廻し」という地名の場所につくと、ここで行事が始まる。この場所は、古来から竜宮に通じる龍神の住む場所とされている。ここで行われる「太鼓おどり」は、大きな太鼓を首にかけた縄で腹に抱えて、地面すれすれに左右に振り、足を交互に高く上げてたたくというものである。やがて、龍は祈りとともに、川上にある三ツ釜（三つの深い淵がある）に収められる。この「伊自良十六拍子」は、大正の中頃まで、田植えを終えるとどの地区でも休日に「十六拍子」を競演していた。伊自良地区の夏の風物詩と言われていた。また、昭和34年には、伊自良村無形文化財に指定、昭和46年には、全国太鼓祭りに出演（三重県）した。参考資料「伊自良誌」等



輪になって行う雨乞いうたと踊り



太鼓を抱えて行う「太鼓おどり」



釜ヶ谷山頂にある「千把小屋」



釜ヶ谷の中腹の甘南備明神



大森にある逢拝所（神明神社）



昭和初期の「龍廻し」と龍を納める三ツ釜の「竜神」



昭和61年甘南美寺前の「龍廻し」